

岸上慎二校

渡樸和歌集

爲相自筆
天福本

上

古典文庫

岸上慎二校

渡樸和歌集

爲相自筆
天福本

上

古典文庫

古典文庫 第一二五冊

昭和三十三年十二月二十日 印刷發行

非賣品

校者 岸 上 慎 二

集歌和撰後
上

編輯兼發行者 吉 田 幸 一
東京都北區西ヶ原三ノ三四

印刷者 英和印刷株式會社
東京都千代田區神田三崎町二ノ六

發行所

東京都(豐島局區內)
北區西ヶ原三ノ三四

古 典 文 庫

振替口座東京一四五九七番

凡 例

一、本書は、藤原定家の「天福本後撰集」のうち、冷泉家に傳來したと思はれる日本大學圖書館所藏冷泉爲相自筆と考へられるものを、忠實に活字に翻刻したものである。

一、活字に移すに當り、原文のまゝを原則としたので、漢字の異様な使用も、又假名遣の誤りも正さなかつた。ただ異體の漢字及び假名を少しく通行體に改め、なほ通讀の便宜を考へ、本文のみ（注記の校合本文は除外）濁點をふり、詞書等には句讀點も施した。

一、本書の誤字、補入、削改、みせけち等については、次の處置をとつた。

（イ）誤字、四、五箇所誤字と思はれる部分があるが、それは當該部分の本
文の傍に「▲」の符號をつけその下の括弧の中に正しいと思はれる文字
を挿入した。その訂正の理由については解説の部に説明する。

(ロ) 補入記號「。」をもつ傍注は、それぞれ當該箇所へ補つて示し、その補入された文字の傍に「。」の符號をつけた。なほ行間に細字をもつて、補入形式で示されている和歌、詞書はその旨その箇所へ注記する。

(ハ) 補入記號「。」をもたないが、補入と考へられる傍注は、それぞれ當該箇所へ補つて示し、その補入された文字の傍に「*」の符號をつけた。

(ニ) 削改及びなぞり改めの文字は、その該當部分の文字の傍に「△」の符號をつけた。

(ホ) みせけちはそのまま、みせけち點をつけて示した。

一、右のほか、天福本後撰集には、定家の墨筆になる勘物注記と、朱筆になる藤原行成筆後撰集との相違箇所の注記とがある。今、朱筆の文字はゴチック活字を以て表はし、その朱の符號にはその形を模した符號をつけ、その下又は傍に(朱)と注した。そのうち、朱點には語の中間にうたれた、即ち行成本にはその間に、他語の存在を示すものと、語の傍にうたれた、即ちみせけ

ち點、行成本にはないことを示すものがある。なほ、普通の六號活字の注記文字は原則として墨筆であることを示す。

一、本書が出版されるに當り、印行の願出を心よくお許し下さつた、大學圖書館當局と、印行をおすゝめ下さり、以後いろ／＼と御配慮いただいた古典文庫主、吉田幸一氏とに厚く感謝したい。なほ原文よりの謄寫には、日本大學第一高等學校教諭、佐藤光一君の力添へをえた。

一、下卷末尾に、解説、初句索引、作者索引などを収める。

昭和三十三年六月

岸 上 慎 二

目次

凡例……………一

後撰和歌集〔上〕

歌番號

卷第一 春上 (一……四六)……………七

卷第二 春中 (四七……八〇)……………一八

卷第三 春下 (八一……一四六)……………二六

卷第四 夏 (一四七……二二六)……………四三

卷第五 秋上 (二二七……二九〇)……………五五

卷第六 秋中 (二九一……三五〇)……………六六

卷第七 秋下 (三五二……四二二)……………八二

卷第八	冬	(四三……五六)	……	100
卷第九	戀一	(五七……六〇)	……	111
卷第十	戀二	(六一……六九)	……	130
卷第十一	戀三	(七〇……七四)	……	154
卷第十二	戀四	(七五……八九)	……	176
卷第十三	戀五	(八九……九三)	……	101

後撰和歌集 卷第一

春、上哥
(朱)

元日に

正月一日二條のきさいの宮にてしろきおほうちぎをたまはりて
、、、、(朱)

藤原敏行朝臣

一 ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりとおどろかれぬる

はる立日よめる

凡河内躬恒

、、、(朱)

二 春立ときゝつるからにかすが山消あへぬ雪の花とみゆらむ

兼盛王

三 けふよりは荻のやけ原かきわけて若菜つみにと誰をさそはん

ある人のもとにひまいりの女の侍けるが、月日ひさしくへて、む月のつ
いたちごろにまへゆるされたりけるに、雨のふるを見て

よみ人しらず

四 白雲のうへしるけふぞ春雨のふるにかひある身とはしりぬる

朱雀院の子日におはしましけるに、さはること侍て、えつかうまつらで、
すして

延光朝臣につかはしける

左大臣 小野宮

五 松もひきわかなもつまず成ぬるをいつしか櫻はやもさかなむ

院御返し

六 松にくる人しなければ春の野ゝわかなも何もかひなかりけり

子日におとこのもとより、けふはこ松ひきに、
のへに
(朱)なんまかりいづるといへり
ければ
よみ人しらず

七 君のみや野邊に小松を引にゆく我もかたみにつまんわかなを

題しらず

古今興風哥相似

八 霞立かすがのゝべのわかなにもなり見てし哉人もつむやと
に まれん

のとも 侍
子日しにまかりける人に、をくれてつかはしける

みつね

九 春のゝに心をだにもやらぬ身はわかなはつまで年をこそつめ

(朱)

宇多院に子日せんとありければ、式部卿のみこをさそふとて

行明親王

延喜親王實寛平
第十母京極御息所

此本無

一〇 ふるさとのゝべ見にゆくといふめるをいざもろともにわかなつみてん

はやきはつ春の哥とて

紀友則

二 水のおもにあや吹みだる春風や池の氷をけふはとくらむ

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

よみ人しらず

三 吹風や春たちきぬとつげつらん枝にこもれる花さきにけり

しはす許に、やまとへ事につきてまかりけるほどに、やどりて侍ける人の
家のむすめを思かけて侍けれど、やむごとなきことによりてまかりのぼり
にけり。あくるはるおやのもとにつかはしける み つ ね

三 かすがのにおふるわかなを見てしより心をつねに思やる哉

かれにけるおとこのもとに、そのすみけるかたのにはの木のかれたりける
えだを、おりてつかはしける

兼覽王女

一四 もえいづるこのめを見てもねをぞなくかれにし枝の春をしらねば

女の宮づかへにまかりいで、侍けるに、めづらしきほどは、これかれ物い
ひなどし侍けるを、ほどもなくひとりにあひ侍にければ、む月のついたり
許にいひつかはしける
よみ人しらず

二五 いつのまに霞立覽かすがの、雪だにとけぬ冬とみしまに

題しらず

閑院左大臣 冬嗣

二六 なをざりに折つる物を梅花こきかに我や衣そめてむ

前栽に紅梅をうへて又の春をそくさきければ 藤原兼輔朝臣

入古今
中納言右衛門督
承平三年薨
、(朱)
中納言

二七 やどちかくうつしてうへしかひもなくまちどをにのみにほふ花哉

延喜御時、哥めしけるにたてまつりける

紀貫之

二八 春霞たなびきにけり久方の月の桂も花やさくらむ

おなじ御時、みづし所にさぶらひけるころ、しづめるよしをなげきて御覽天
もせしめ

ぜさせよとおぼしくて、ある藏人にをくりて侍ける十二首がうち
くらむと

みつね

一九 いづことも春のひかりはわかなくにまだみよしの山は雪ふる

人のもとにつかはしける

伊勢

二〇 白玉をつゝむ袖のみながるゝは春は涙もさえぬなりけり

ひとにわすられて侍けるころ、雨のやまずにふりければ

よみ人しらず

二一 春立てわが身ふりぬるゆくながめには人の心の花もちりけり

題しらず

万葉

三 わがせこに見せむと思し梅花それとも見えず雪のふれゝば

二三 きて見べき人もあらじなわがやどの梅のはつ花おりつくしてむ

二四 ことならば折つくしてむ梅花わがまつ人のきても見なくに

二五 吹風にちらずもあら南むめの花わが狩衣ひとよやどさむ
てまた

二六 わがやどの梅のはつ花ひるは雪よるは月とも見えまがふ哉
わたる

二七 梅花よそながら見むわざもこがとがむ許のかにもこそしめ

素性法師

二八 むめの花おればこぼれぬわが袖にゝほひかうつせ家づとにせん
山

おとこにつきてほかにうつりて

よみ人しらず

二九 心もておるかはあやな梅花かをとめてだにとふ人のなき

本無此
詞

年をへて心かけたる女の、ことし許をだにまちくらせといひけるが、又のと

しもつれなかりければ

三 人心うさこそまされはるたてばとまらずきゆるゆきかくれなん

題しらず

三 梅花かをふきかくる春風に心をそめば人やとがめむ

三 春雨のふらばの山にまじり南梅の花がさありといふなり

三 万
無 かきくらし雪はふりつゝしかすがにわが家のそのに鶯ぞなく

三 谷さむみいまだすだゝぬ鶯のなくこゑわかみ人のすさめぬ

三 鶯のなきつるこゑにさそはれて花のもとにぞ我はきにける

三 花だにもまださかなくに鶯のなくひとこゑを春とおもはむ